

高木兼寛先生と「青天を衝け」の渋沢栄一

宮崎神宮宮司 本部 雅 裕

先日私は、宮崎県立佐土原高等学校生徒に日向神話と宮崎神宮についてお話をする機会を得ました。神話に登場する神々がいかに人間的で、そして現在の我々の生活にも身近な存在であるかを理解していただくやう話を進めました。

また、授業で郷土の偉人高木兼寛先生にもふれましたが、それを聞いた先生と同郷で高岡町出身の生徒から、「先生が脚氣の原因を発見したお医者さんとは知っていたが、宮崎神宮を造った人とは知らなかった」との感想がよせられました。

これが今の宮崎県民の平均的な意識であらうと存じますので、今回改めて高木兼寛翁のご偉業を振り返ってみます。

ました。一方、イギリス医学に学んだ高木兼寛は、脚氣は軍隊の米飯中心の食事にあるとして、麦飯も取り入れ、大きな航海実験の結果、病因は栄養にあることを突き止めました。ビタミンB1の欠乏です。この食事改良で海軍からは脚氣がなくなり、米飯をやめない陸軍は、のちの日露戦争までこの病気で苦しむこととなります。

さて高木翁は、郷土宮崎を、特に第一代神武天皇を祀る宮崎宮（のちの宮崎神宮）を、官幣大社としてもつと威厳のある立派な建物にしなければといふ願望があり、「神武天皇御降誕大祭会」を設立し、自ら幹事長の要職に就きます。明治天皇から強い信頼を得てゐた高木翁は、皇室からのご内帑金を受けます。また、各宮様方をはじめ、政財界から広く浄財を募ることになります。この会の中心人物のひとり

先生は、今の宮崎市高岡町穆佐にお生まれになり、鹿児島で医学を学び、海軍省に仕官。のち英国セント・トーマス病院医学校に留学、抜群の成績で卒業してゐます。帰朝して、のちには大日本帝国海軍軍医総監に任じられます。因みに、当時の陸軍の軍医総監は森林太郎（作家名森鴎外）です。また翁は、我が国第一号の医学博士。明治天皇の侍医も務め、男爵の爵位を授けられました。最も知られてゐるのは、東京慈恵会医科大学の創立者であることとせう。

当時の陸海軍では多くの兵士が脚氣に悩まされておりました。その原因についてドイツ医学の東大医学部卒を中心とした陸軍軍医は、「脚氣病菌説」、伝染病だと主張してゐ

マの主人公、渋沢栄一です。彼の癌の手術を執刀した高木は、九歳年下でありましたがずっと先生と呼ばれて尊敬されてゐたといひます。かういふ次第で、渋沢栄一をこの会の監事に任じ、広く財界の募財に当たらせたいと思はれます。

かくして明治四十年、高木兼寛翁のご尽力により今の御殿が完成しました。一十四年を経た今日、郷土の銘木杉材（神社建築の主流は檜材ですが）のご本殿以下神殿は、荘厳で堅固なたたずまひを保つてゐます。

ここに改めて、高木翁のご偉業を称へ、ご遺徳をお偲び申しあげます。

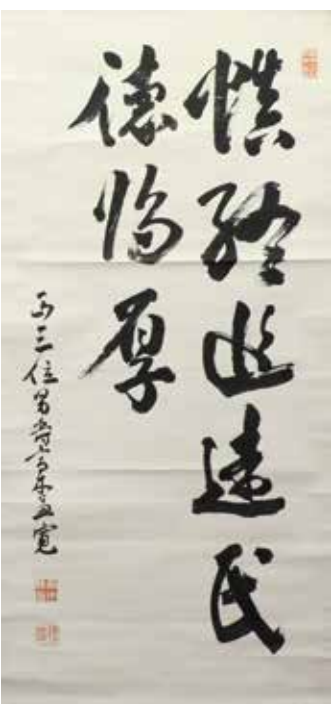
参考文献

吉村昭著『白い航跡』

倉迫一朝著『病気を診ずして病人を診よー麦飯男爵高木兼寛の生涯』

社報『養正』一五七号より

高木兼寛奉納書／宮崎神宮蔵



慎終追遠 民徳帰厚

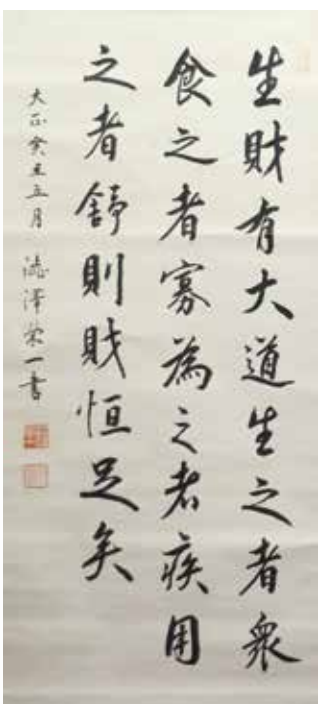
正三位男爵高木兼寛

終はりを慎み遠きを追へば民の徳厚きに帰せん

↳ 論語

上に立つ者が亡くなった人を丁重に弔ひ、先人達を大切にしていれば、国民の国に対する思ひも大きくなっていくものです。

渋沢栄一奉納書 大正癸丑（二年）五月／宮崎神宮蔵



生財有大道 生之者衆
食之者寡 為之者疾 用
之者舒 則財恒足矣

大正癸丑五月澁澤栄一書

財を生ずるに大道あり

これを生ずる者衆くして、これを食らふ者寡なく、これを為す者疾くして、これを用ふる者舒やかなれば、則ち財恒に足る

↳ 論語

国の財政を豊かにするにも大道がある。

働いて財を生産する者を多くして、ただ消費する者を少なくし、生産する者は迅速に仕事に取り掛かり、消費する者は穏やかに財を消費すれば、財政（財産）は常に不足するということがない。



Instagram
はじめました

宮崎神宮

記

- 一、期間 令和六年六月二十九日(土)～同七月十五日(月・祝日)
- 一、場所 宮崎神宮御札所
- 一、拝観料 無料

令和六年七月三日より新紙幣が発行されます。一万円札に「近代日本経済の父」と呼ばれる渋沢栄一、五千円札に日本で最初の女子留学生としてアメリカで学んだ津田梅子、千円札に破傷風の治療法を開発した細菌学者の北里柴三郎の肖像がデザインされます。

殊に渋沢栄一は、明治三十二年に発足した神武天皇御降誕大祭会の監事として、現ご社殿等のご造営に尽力された当宮所縁の人物です。この節目にあたり、当宮に奉納の掛軸を左記にて展示致しますので、どうぞご覧ください。

宮崎神宮御造営に尽力された

高木兼寛先生と渋沢栄一



左上／昭和19年11月1日発行、昭和28年12月31日まで流通した拾銭紙幣。
 右上／紀元2600年記念拾銭切手(昭和15年発行)。神武天皇がご東遷の折に立ち寄られた丹生川上(奈良県吉野郡)での故事に則った巖笠(いつへ)と鮎が描かれてゐる。
 右下／八紘之基柱が描かれた四銭切手(昭和17年発行)



拾銭紙幣に描かれた「八紘之基柱」

昭和十五年、宮崎県は紀元二千六百年記念事業の一環として下北方後方の丘陵、西は遠く高千穂峰を仰ぎ東は太平洋を望む地を選んで、高さ三六・四mの「八紘之基柱」(現「平和の塔」)を建設しました。

正面には、秩父宮雍仁親王殿下の揮毫された「八紘一字」が刻字されてゐます。この熟語は、神武天皇ご即位二年前に発せられた「橿原建都の詔」の「六合ヲ兼テテ以ツテ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ヒテ宇トセムコト、又可カラズヤ」からの造語で、初代天皇の建国にあたっての理想が宣言されてゐます。国家を一つの「家」に見立てた平和思想で、八紘一字といふ神武天皇の大御心を体して、国民が一家のやうに睦み合ひたいといふ悲願が込められてゐます。

塔そのものが御幣の形をしてをり、塔内には巖室と呼ばれる奉安所(当時は秩父宮の「八紘一字」のご親筆が掲げられた)が設置され、更に四隅には、「荒御魂像」(武神)、「奇御魂像」(漁神)、「幸御魂像」(農耕神)、「和御魂像」(工神)の神々の像が据ゑられました。

設計者の日名子実三は、宮崎神宮にて御幣を拝した折にインスピレーションを感じ

たとされてゐます。同様に考案者相川勝六知事も「基柱は罪穢を祓ふ御幣なのです」と、述べてゐます。

塔前には毎日二円から三円の賽銭が投げられ、筵を敷いて対応したといふことから、当時の県民意識としては、信仰の対象物として見做してゐたことが解ります。



八紘之基柱起工式(昭和14年5月20日宮崎神宮奉仕) / 翌年11月15日に竣工。



ご造営時のご社殿